

託すクセ者に 冒険

文・松井宏員 写真・岩本浩伸 デザイン・シマダタモツ

東學さん(55)の墨画集「天妖」を作り上げた直後の2008年、アサヒ精版印刷のマリさん(築山万里子さん)が手掛けることになったのが、展覧会の図録だった。

図録は初めてで、しかもこれが予測不能の事態が続出する波乱に満ちた仕事になる。だいたい、図録を納入したのが展覧会が始まる前日の内覧会の朝だったというのだから。マリさんも含めて、関わった誰もが「あんなことはもう二度とできない」と言うが、誰もがそのあとに「あの仕事に出合えたのは幸せ」と続ける。マリさんは「學さんのをやったので、そんなにびびらなかった」とうそぶくが、マリさんのお母さんは、文字通り休む間もなく駆け回る娘を「死ぬんじゃないか」と心配した。

その図録制作を仕切るアートディレクターを務めたのは、グラフィックデザイナーのシマダタモツさん(54)＝写真。學さんと並ぶクセ者の双璧で、アサヒ精版に無理難題を持ち込む筆頭。独創性は他の追随を許さず、どんな仕事にも妥協しない。付け加えれば、この連載のデザインもやってもらってます。シマダさんのモチベーションは「誰もやってないことをやりたい」。そして「人の喜ぶ顔が見たい」。この連載の初回でマリさんもおんなじことを語っている。似た者同士なのかもしれない。

「シマダさんは無理言ってると思ってない。こんなんしたいって言うてるだけ。いつもハードルを上げてもらうので、飛び越えようとこっちも努力する。挑戦を与えてもらえないと、先に行けないので」

マリさんがそう語る仕事ぶりの一端を、図録作りから見ていくのだが、そもそも「純粹なる形象—ディーター・ラムスの時代」と題した展覧会自体が、いっぷう変わっていた。大阪にあったサントリーミュージアム[天保山]が展示したのは、美術品ではなく電気製品の数々。ディーター・ラムスとは、ドイツ・ブラウン社で長年、製品のデザインを手掛けた工業デザイナーだ。ブラウンといえば電気シェーバーが思い浮かぶが、昔はラジオやレコードプレーヤーにスピーカーなどの音響機器、フードプロセッサーやジューサーなど台所の家電も作っていた。

この展覧会を企画したのが、当時サントリーミュージアムの学芸員だった植木啓子さん。「20世紀、特に戦後に影響を与えた工業デザイナーと考えた時に浮かんだのがラムス。でも工業デザインだけで展覧会なんて、誰も手を出さないですよ。組織的にも冒険でした」と苦笑する。

冒険を成功させるには、アートディレクターは信頼できて、なおかつ驚かせてくれる人でないと……。そんな条件に当てはまるのは、シマダさんしかいなかった。